

[10_5] 図書館情報 : 九州大学附属図書館月報 :
10(5)

<https://doi.org/10.15017/18292>

出版情報 : 図書館情報. 10 (5), pp.19-24, 1974-05-25. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

研究図書館であることのむづかしさ

鳥山隆三

理農両学部のはぼ中間に新中央図書館が完成してから1年あまりたった。旧館時代の図書館は名称は中央図書館だが、お方方の理解としては文科系の図書館と学生のための学習図書館というのがイメージであった。それが新館に移って理農両学部の研究図書と兼ねるという大きなイメージチェンジをすることになり、移転後1年間は暫定期間として、その間に研究図書館としてのルールを敷こうということだったが、うまく軌道にのったかどうかを確かめる前に私は九大を離れてしまった。この小文はあまり有能でなかった元図書運営委員長のたわごとである。

移転の論理：理学部1号館が昭和35年に完成した時にそれまで分散していた各教室図書室が1カ所にまとまって理学部図書室（実質的には分室）ができた。これは当時の理学部の規模が現在の半分位であったのと、全教室が1つの建物に入るので、あまり強い反対がなかったためである。ところが今度の新館移転についてはそう簡単にはいかなかった。院生諸君は新図書館がたまたま理学部の近くにできるから移転するというのではなく、移転の論理を明確にせよといってきた。理学部というところはなにかという論理が先でなかなかむづかしいところである。

図書は誰のもの：一つの学部である理学部のなかでさえ構成5教室の図書に対する考え方は非常に違っている。物理・化学・生物の多くの研究者にとっては図書（とくに雑誌）は up-to-date なものに価値があり、10年もたてばほとんど利用価値はなくなってしまふ。地学の研究者は全部ではないが今でも1800年代の文献さえ必要である。数学の研究者にとっては図書は他学科の実験設備に相当するもので手元においておかななくては意味がないし、教室内に図書室をもたない数学教室はどこにもないという。

理学部のなかでさえこうだから、全学となるとなおさら大変である。図書は手元におくのが便利であるに違いない。これが極端になると必要な図書を全部借りっぱなしにして研究室においておくことである。これはしかし他の研究者には迷惑なことだし、図書は個人のものではない。大きさにいうと校費、つまり国民の税金で購入した図書は誰でも利用する権利がある。これに対し図書館商議委員会で文科系の先生から、国民の税金で買った本だからこそもっとも利用する教官の手元においてできるだけ利用するのが納税者にこたえる道だという意見を伺ったことがあるが、これにはどうも賛成し兼ねた。

研究図書館への道：北川図書館長時代に図書館の近代化についていくつかの小委員会ができマスター・プランができた。これによると新図書館は旧館と同様に文科系を主にした近代的図書館になるはずだった。ところができ上ってみると文科系各学部はお家の事情もあって新館に入らず、結果としては理学部図書室全部と農学部図書室の一部が入ってしまった。そこで今までは全然違った理科系の研究図書館としての機能を最大限に発揮するにはどうしたらいいのか。研究者の要望を運営にどう反映させたらいいか。それに中央館としての図書行政をどうかみ合わせるか。この問題には残念ながら best solution はないようで、trial and error を繰り返すというきわめて常識的な答しかでてこないようである。

研究図書館としては、その他に沢山宿題がありそうである。この頃のように加速度にふえる情報の蒐集を限られた予算でどう処理してゆか、全国の理科系図書館での分担購入（医科系図書館では既に実施している？）もそろそろ考えてよい時期ではなからうか。

旧制7大学のなかで、九大は図書館定員が極端に少ない問題も歴代館長の努力にもかかわらずなかなか解決しない。この問題は利用者へのサービス向上につながるので全学の暖かい理解がもっと必要のようである。

第13回ドキュメンテーション講習会(岡山会場)に出席して

有 田 滋 子

メインテーマ—「情報の増大と多様化に伴うドキュメンテーションのあり方」

プログラム 3月13—15日(10:00~16:30)

- 第1日** 1 学術情報の流通体制の改善について—世界およびわが国の動向—(大塚明郎)
 2 学際領域研究の進展と学術情報—知識の再編成と情報—(吉村 融)
 3 言語面からみた情報処理の諸問題(長尾 真)
- 第2日** 1 国文学の分野における情報活動—その現状と将来への展望—(市古貞次)
 2 東洋学の文野における情報活動—その現状と将来への展望—(市原亨吉)
 3 専門図書館における相互協力—医学図書館の場合—(岩井昭三)
- 第3日** 1 専門分野における国際的な学術情報処理システムの動向(1)—ERIC(教育資料情報センター)の場合—(中山和彦)
 2 専門分野における国際的な学術情報処理システムの動向(2)—INIS(国際原子力情報システム)の場合—(長山泰介)
 3 コンピューターと著作権(小山忠男)

以上の各題目について、2時間ずつ講義があった。窓外に小雪がちらつき、講義室も寒かったが、講師の方々は大変熱心でとても時間が足りないようであった。日頃は日常業務に追われて不勉強な私自身としても、一つ一つについて詳細な報告をすることが出来ないで、講習会全体として受けとめ得た部分について書いてみたいと思う。今まで実務を通して理解していたことの裏づけを得られた面が多くあったが、なお一層多くの疑問を持ち帰ったことも事実である。帰学してみれば年度末ではあり、溜った仕事に追われながら反すうしてはみても、なかなか言葉にまとまらないのが残念である。今回は大学図書館職員のための講習会であったので、現在の学問の動向と直接関連しながら講義がすすめられたことは大変有難かった。

はじめに、メインテーマに焦点を合わせながら、国際的機構について、次にそのうちの専門分野(医学・教育学等)のみの国際組織の現状について学んだわけであって、その中に国文学、東洋学等伝統的な目録形態を持った分野の特殊性をもあわせて考えてゆかねばならないということであると思う。近年急速にこのような機構が発展したについては、学問の国際交流の機運が高まり、交通、通信の発達と共にコンピューターの開発が前提となっているので、今回のテーマもそれ以前には考えられない問題であったと思われる。国際学会が盛んに開かれ、学術情報流通体制が整備されてくると、学問の形、方法も変化して来る。自然科学の分野では特に情報の新しさと確実さが要求される。人文科学も含めて、今まで学者、研究者は資料の収集と整理に多くのエネルギーを費していた。今後ますます情報が増すとしても、キーワードによって相当のデータが揃うことになればずい分と助かるのではなからうか。それにしてもこのシステムにのって、アメリカを中心に相当の体制が出来ているのは医学、教育学のみで、しかも日本側は利用度の高い割に報告数が少く、国内体制の整備がいそがれている。この場合最も困難なものは学術用語の標準化の作業で、各分野で進められているそうである。

第2番に登場する学際領域研究(又は学際的研究)の問題は特に興味があった。今までたて割りにわかれていた学問の領域が、次第に講座別、学部別の壁を越えて協力し合うようになって使われた言葉のようである。総合科学研究のタイトルにもみられるし、この考え方を具体化したものとして、東大教養学部、筑波大学等があるのではなからうか。今一番わかりやすいテーマとして公害問題が度々引用されていたが、この解決のためには政府各官庁をはじめ、大学、研究所、病院、企業、一般市民等々の協力を必要とし、内容的には、政治、経済、自然科学、社会科学、医学、教育等あらゆる面から検討されねばならず、結局は、国民の倫理観、その思想哲学まで掘りさげてゆかねばならない。こうして現在の大学制度もこの意味では解体されねばならず、大体図書の分類等というものは、国内、否世界共通でなければならず、コンピューターにものらねばならず——。

今、しかし、わが職場にもどり30万冊に近い書庫を見廻し、或る講師の言われた言葉を思い出す—「わが母校の文学部においてはあらゆることは、まず『テッペン』にわけられ……」—まさにそのように並んでいる、増大し多様化した情報の山を前に、たどりゆくべき小目標さえ、月よりも遠い思いに、いささか目まいを覚えるようである。

(ありた・しげこ: 文学部図書掛)

資料紹介

昭和48年度受入欧文参考図書

—中央図書館—

1. Australian National Bibliography. -1972.
2. Britain: An Official Handbook. -1973.
3. Britannica Book of the Year. -1973.
4. Contemporary Authors. Vol. 1/4-33/36.
5. Dictionary of Scientific Biography. Vol. 5-7 (1972-1973)
6. Directory of Special Libraries.
7. Dizionario Biografico degli Italiani. Vol. 12-15 (1970-1972)
8. Encyclopedia of Library and Information Science. Vol. 9-10
9. Engineering Index. 1971 (1-4)
10. Index Translationum. Vol. 23 (1970)
11. Lessico Universale Italiano. Vol. 11 (1973) & Atlante e Repertorio Geografico.
12. McGraw-Hill Yearbook of Science and Technology. -1973.
13. Österreichisches Jahrbuch. 43 (1971)
14. The Statesman's Year-Book.—1972/1973.
15. The Times Concise Atlas of the World.
16. U. S. Library of Congress. Subject Cataloging Division.
Classification.
Class. B: Philosophy and Religion. Pt. 2.
N: Fine Arts. Pt. 2.
P: Philology and Literature.
PA, PG, PQ(Pt. 2), PT(Pt. 2), PN, PR, PS, PZ, PJ-PM, P-PA
17. The Universal Reference System.
1971 Annual Supplement. Vol. 1-3.
18. The Universal Reference System.
1972 Annual Supplement.
Political Science Series. Vol. 1-3.
19. L'Université des Études Étrangères de Kyoto Catalogue des Livres Français. I.
20. Who's who. -1973.
21. Who's who in France. -1973/74. 11 ed.
22. The World of Learning. -1972/73. Vol. 1-2.
23. Библиография Изданий Академии Наук СССР. Ежегодник. Том. 14.
24. Библиография Японии. Литература, Изданная в России с 1734 по 1917 г.
25. Библиография Японии. Литература. Изданная в Советском... 1917 по 1958 г.
26. Большая Советская Энциклопедия. Том. 10-13 (1972-1973)
27. Ежегодник Книги СССР. 1969 Том. 2, 1970 Том. 1.

レファレンス・コーナー (その30)

—中央図書館情報資料掛—

中央図書館の情報資料掛(電・5310・5317)では、利用者の方々から寄せられてくるいろんな質問事項の調査を行なっていますが、ごく最近にあった質問のなかから幾つかを、ご参考のためにこへ挙げてみることにします。

質問1 昨年総理府が行なった世界青年意識調査の概要と調査結果の評価と問題点などを知りたい。

回答例 中央図書館では、新聞(朝日・毎日・読売・西日本)の切抜きファイルを行なっている。各紙それぞれ次のような見出しで、世界青年意識調査の概要を報じ、解説している。〈朝日、7月29日朝刊:日本の若者は人間不信——性悪説が3割超す。政治不満も群を抜く〉〈毎日、7月29日朝刊、8月1日朝刊:不満いっぱい日本青年——国の開発優先に疑問、人間性悪説33%で最高、親友少なく親切心薄い〉〈読売、7月29日朝刊:日本青年は祖国に不満——親友少なく孤独、性悪説は最高率〉〈西日本、7月29日朝刊:先進国ほど未来に悲観的——外国は「誠実・愛」、人生目標、日本だけが「仕事」〉

質問2 クラーク(Clark, William Smith)は、日本を去るにあたって、Boys, be ambitious (少年よ大志を懐け)の名言をのこしたが、まだそのあとにかなり長文の言葉が続くはずである。それを知りたい。

回答例 百科辞典をはじめ、たいていの辞典類には人口に膾炙されたその言葉だけしか出ていない。教育人名辞典(650/キ/27)で調査。クラークの項に、人物紹介とともにそのときの離別の辞が詳しく出ている。Boys, be ambitious! Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be. (少年よ、大志を懐け! されどそれは金銭のためならず、己が勢力を拓げるためならず、はたまた人の世のはかなき名声のためならず、人としてあらねばならぬすべてのものを成しとげんがためにこそよるしく大望あれ!)

質問3 元禄時代の頃、老中職を勤めていた小笠原佐渡守は、小倉藩の小笠原氏か。

回答例 日本歴史大辞典(602/ニ/3)で調査。同辞典の年表によると、小笠原佐渡守は長重を名乗り、元禄10年4月19日から宝永2年8月27日まで老中職を勤めている。小笠原姓を名乗る大名は、豊前国小倉藩主、播磨国安志藩主、肥前国唐津藩主、豊前国千束(小倉新田)藩主、越前国勝山藩主などがあり、同辞典の「小笠原氏」の項に、各家の系図がある。それによれば佐渡守長重は、唐津藩小笠原家の4代目に当り、小倉の小笠原氏ではない。

質問4 博多湾の箱崎附近の海岸は、ごく最近まで海苔栽培で盛えていたが、いまは河川の汚染や埋立工事などでみるかげもない。箱崎海苔について調べたい。

回答例 海苔の歴史(667.7/Mi83/n)(農学部所蔵)という本がある。東京近海の浅草海苔について書かれたものだが、玄海灘の海苔についても書かれていて、1,296ページに箱崎海苔の項がある。箱崎附近に流入する多々羅川の河口が海苔養殖の産地として選ばれたのは明治26,7年頃のことらしい。当時箱崎の漁業組合長をしていた山崎親次郎の従姉の手塚とみが、たまたま河口近くで縄についていた一片の海苔を発見して、それを山崎へ告げたのが養殖のきっかけだと伝えられている。以後しだいと発展を遂げ、最盛期には従事戸数130戸、年間千数百万枚を産し、県内随一の生産量を誇り、「博多海苔」として名声を博した。

質問5 赤穂市の市章を知りたい。

回答例 日本都市年鑑'72~73(318.7/N77)で調査。巻頭に、都道府県別に各市の市章がある。なおこの年鑑は各市の概況に詳しいが、ほかに「大日本分県地図併地名総覧」(291.03/D25)といったものもある。

◆ お知らせ

入館券および図書帯出券の交付について

中央図書館では、昨年9月新利用規程の実施に伴い、教職員および学生を対象に入館券および図書帯出券発行のための登録業務を行なっています。入館のときは入館券、資料の借出には図書帯出券を必要とします。

新学期を迎え、新しく赴任或は入学された方で、中央図書館、理学部および農学部を資料を利用されるときは、来館の上、上記の登録を済ませ、入館券等の交付をうけて下さい。その際、身分証明書または学生証を必ずご持参下さい。

図書帯出券は1人に3枚（理学部および農学部在籍者には別にその学部の専用券を発行）交付します。この券1枚で図書1冊借りれます。貸出期間は8日間です。学部学生で、卒業論文作成等のため特に指導教官の証明（用紙は中央図書館に用意）を提出された場合は1カ月の貸出がうけられます。また、教官が研究教育のため特に帯出を必要とするときは、10冊以内、1カ月の貸出ができます。

登録は開館中常時受けつけています。資料の借出を希望されたとき直ちに借りられるよう、前もって登録を済ましておかれることをおすすめします。

昭和48年度・登録状況

種別 学部	学生数			教職員数		登録学生数			登録教職員数		登録者数 合計	比率				
	学生	院生	その他	教官	職員	学生	院生	その他	教官	職員		学生	院生	その他	教官	職員
文 教 法 経 済	418 108 792 441	124 66 37 39	46 26 9 7	89 27 39 33	28 28 35 34	261 51 510 292	53 12 19 17	15 1 2 —	16 6 2 3	— 2 2 1	345 72 535 313	62 47 65 66	43 18 51 44	33 4 22 —	18 22 5 9	— 7 6 3
理 農 工	652 493 1,920	248 272 532	38 88 51	186 205 420	161 157 439	516 336 509	240 264 175	36 59 12	175 196 71	74 76 24	1,041 931 791	79 68 27	97 97 33	95 67 24	94 95 17	46 48 6
医 歯 薬 医療短	438 150 156 400	47 — 76 —	142 25 26 —	180 80 59 38	149 57 38 20	23 4 5 3	1 — 11 —	1 — 4 —	4 2 5 2	2 — — —	31 6 25 5	5 3 3 1	2 — 14 —	1 — 15 —	2 3 9 5	1 — — —
教 養	2,896	—	—	173	130	63	—	—	30	1	94	2	—	—	17	1
生 産 研 究 力	—	—	—	37 4 43	69 8 62	— — —	— — —	— — —	8 — 5	2 1 12	10 1 17	— — —	— — —	— — —	22 — 12	3 13 19
事 務 局 等 外 其 他 名 誉 教 授	—	—	—	12	402	—	—	—	3 29 3	34 7 —	37 36 3	—	—	—	25	9
合 計	8,864	1,441	458	1,625	1,317	2,573	792	130	560	238	4,293					

備考：学生数および教職員数は、昭和48年11月1日現在

(中央図書館閲覧課閲覧掛)

◆ 会 議

第4回九州地区国立大学図書館協議会

〈とき：昭和49年5月9日 ところ：九州芸術工科大学附属図書館〉

11大学より館長・事務部長・事務長等28名ほかに文部省情報図書館課より専門員2名が参集して開かれ、当番館の九州芸術工科大学牧田館長を議長に選び協議の結果、6月6・7の両日北海道厚生年金会館において開催の第21回全国国立大学図書館協議会に提出する地区の協議題を次のとおり決定した。

〈地区提出協議題〉

1. 図書館の事務長補佐制度（部課制の場合は課長補佐）について
2. 参考業務担当職員の増員について
3. 参考図書購入費の増額について
4. マイクロフィルム撮影等経費（文献複写料金）の取扱いについて
5. 電算機共同利用の場合の維持費（消耗品代）予算計上について
6. 図書の物管法上の取扱いについて

なお、新役員館として、理事館および連絡館に九州大学、理事館に鹿児島大学を選んだ。この協議会には、本館から松浦館長・蓑輪整理課長・岩井閲覧課長・本多閲覧掛長・桑野庶務掛長が出席した。

第25回九州地区大学図書館協議会

〈とき：昭和49年5月10日 ところ：はかた会館〉

加盟34館から77名が参加して開かれ、九州産業大学の和田館長を議長に選んで議事を進めた。まず、48年度の決算報告および監査報告があり、新年度の予算案を審議し、次の協議題について審議した。

〈協議題〉

1. 他大学図書館を利用する場合の持参する紹介状（願出書）の様式を統一することについて
2. 九州地区における研究用資料の分担収集計画の策定について

あとは永年勤続者の表彰を行なった後、八幡大学の平川富章氏が「Lionel Roy McColvin のプロフィールについて」と題して研究発表を行なった。その後新役員を選出し、明年度の開催地を佐賀県に決定した。本館からは、松浦館長、蓑輪整理課長、岩井閲覧課長、本多閲覧掛長、桑野庶務掛長が出席した。

なお、本学関係の被表彰者は次の4氏である。庄野英三（法学部講師）、重松多喜造（理学部図書掛長）、故中野国治（当時医学分館日録掛長）、西美恵子（薬学部図書掛）

◆ 人事異動

附属図書館医学分館長の異動

49. 4. 1 後 藤 昌 義（医学部教授）田中潔分館長の後任

附属図書館商議委員の異動

49. 5. 1 木 下 悦 二（経）再任
49. 5. 9 秀 村 選 三（経）再任

日 録 49. 4. 21~5. 20

4. 23 九州芸術工科大学附属図書館永芳事務長、原管理係長、九州産業大学川村主任司書、九州地区協議会の打合せのため来館。
4. 25 中央図書館、理学部、農学部および医学分館の共通利用について打合せ会、於 小会議室。
5. 7 図書館情報編集委員会、於 小会議室。
5. 8 広島大学附属図書館福山分館山口係長見学のため来館。
5. 9 鹿児島大学附属図書館山根館長、琉球大学附属図書館平良事務長、沖縄国際大学附属図書館宮

- 平館長見学のため来館。第4回九州地区国立大学図書館協議会、於 九州芸術工科大学、松浦館長、蓑輪整理課長、岩井閲覧課長、本多閲覧掛長、桑野庶務掛長出席。
5. 10 第25回九州地区大学図書館協議会（当番館九州産業大学）於 はかた会館、松浦館長、蓑輪整理課長、岩井閲覧課長、本多閲覧掛長、桑野庶務掛長出席。
5. 11 福岡女子短期大学別府助教授、山崎講師来館。
5. 13 第102回図書館商議委員会、於 視聴覚室。

編集委員 主査・岩井昭三 委員・蓑輪 武、小野敏夫、本多震一、八尋重久、岩井 護、桑野 貢（中央図書館）福永寿夫（医学分館）堺 弘（教養部分館）友納昭二（経）重松多喜造（理）田端時夫（工）平川友視（農）河上 保（産研）

九州大学附属図書館月報「図書館情報」Vol. 10, No. 5（通巻96号）

1974年5月25日発行・発行人 中 村 護

発行所 九州大学附属図書館・福岡市東区大字箱崎 3576・〒812・電話代表(641) 1101 内線5301